

2024年12月

課題本 『世界でいちばん幸せな男』

エディ・ジェイク/著 金原瑞人/訳 河出書房新社 2021年

◆◆◆12月の読書会から

今月の課題本は『世界でいちばん幸せな男』です。ブーヘンヴァルトやアウシュヴィッツなどの強制収容所に送られ、壮絶な体験をした著者が世界に伝えたかったこととは――。

アウシュヴィッツに関する課題本はこれまでに何回かとりあげたこともあり、今月もさまざまな感想が出ました。

また、日本原水爆被害者団体協議会がノーベル平和賞を受賞し、授賞式が読書会の前日に行われたタイミングでしたので、そのことについても話が出ました。平和について改めて考える機会にもなりました。

(文責:森下)

2024年竹原読書会 12月『世界でいちばん幸せな男』

(エディ・ジェイク 金原瑞人:訳 2021 河出書房新社)

吉川五百枝

「The Happiest Man on Earth」

—101 才、アウシュヴィッツ生存者が語る美しい人生の見つけ方—

そして裏表紙には Life can be beautiful if you make it beautiful. It is up to you . の文字が見えます。〈人生は、美しいものにしようと思えば美しいものになる〉著者は、本の書き出しに、この言葉を掲げました。

「アウシュヴィッツ強制収容所」と「美しい人生」という文字を見ると、1997年の映画「ライフイズビューティフル」を思い出します。「どんな状況下でも人生は生きるに値するほど美しい」(ソ連のトロッキーの言葉)が基になったそうです。

この本でも「美しい人生」といわれます。映画もこの本も、「アウシュビッツ強制収容所」が背景にあって、その過酷な状況を経験してもなお、「美しい人生」といわれる言葉は、どうやって見出されたのかと問いたくなるのです。

「世界でいちばん」とは、他の人と比べる言葉ではなく、「世界でたった一つの物語」なのだと思います。私たち一人ひとり、みんなその人にとっての、世界でただ一つの物語を持っています。これまで「アウシュビッツ強制収容所」についての記述や映像にたくさん出会ってきました。そこには、似ていても同じ苦しみが語られることはありません。

あの大战中、ドイツ占領下で約600万人のユダヤ人が亡くなられたそうですが、600万人分の物語があったはず。亡くなった人達の代わりに、その1つであるエディ・ジェイクが語る人生を聞かせてもらい、そんなつもりで読み始めました。

収容所生活に選択の余地はなく、自由になるのは自分の思考の世界のみです。

そういう人生に、どうして「美しい」と言う言葉がかぶせられるのか。

体験の中で、「美しくない」ものにであっているに違いない。その「美しくない」ものを、どうやって「美しいもの」に変えていったのか。101歳になる幸せな男エディ。

人生を美しいものにした(make)ドイツ生まれのユダヤ人。

彼は、13才で技術者になる学校に入ったものの、ユダヤ人は退校させられます。書類を偽造してくれた父のおかげで工学教育を受け続けました。18才まで働きながら学び、勉強好きな職業人として技術力を身につけます。ここに、教育による力の獲得という自分をアップするためのキーワードが見えます。

エディの父のイザドールは、ポーランドからの移住ユダヤ人ですが、ドイツへの愛国心が強く、ドイツ人である誇りをもっています。しかし、反ユダヤ主義のナチスとヒトラーが、ユダヤ人をドイツ国家第一の敵として「ユダヤ人狩り」を始めました。ヨーロッパの各国は、ユダヤ人に安住の場所を与えられなかったのです。

「美しくないもの」その一つの姿は、「敵」を作る事。お互いが分断させられる世の中になることです。それは現在も世界中に広がり、危険な合図だと思えてなりません。

1938年11月9日、「水晶の夜」。水晶は透明な美しい石ですが、反ユダヤ主義の暴動で窓ガラスが道路いっぱい散らばり、破片が月光を浴びて水晶のように輝いていたからそう呼ばれた夜の事です。この日付は、ヨーロッパ在住のユダヤ人にとって悲惨な戦争の年月の始まりの日として記憶されるでしょう。文明的なはずのドイツ人から残虐行為を受けるエディ達は、人間への信頼を失いました。

反ユダヤ主義を標榜するナチスが、人々に「美しくないものを」見せつけた7年間。

ここにも書かれ、その他にも多くの記述が残っています。ユダヤ人は敵だという洗脳。謂れない憎しみ。強者への盲従。

〈ヒトラーはどうやって友人を敵に変え、文明人をゾンビのような人間に仕立てることができたのか〉エディにも、多くの人にとってもなぞです。

〈人間の最悪の部分、死の収容所の恐怖を、……ナチスの暴力を目にしてきた〉

〈わたしは悪を間近に見るのがどういうことか知っている。〉

その彼に、人生の「美しさ」を取り戻させたのは何か。

彼の精神の根底になっているのは、ユダヤ教に依る父の信条だと思われれます。

『夜と霧』のフランクも、自身はユダヤ教徒です。収容所生活を支えたのは、イスラエルの(今の国名では無く)民というモーゼの律法であったでしょう。

お金より大切なものがある。やさしさはどこにでもみつけれられる。見知らぬ人からもらうこともある。母親を抱きしめよう。教育は身を助ける。モラルを失えば、自分をうしなう。命あるところに希望はある。愛は最良の癒し。分かち合えば悲しみは半分に、喜びは倍になる。分かち合うべきは苦しみではない、希望だ。

それらが「美しい」人生の要素なのだ、彼は何かにつけて思い起こし、それに導かれて行動します。〈わたしを大事に思ってくれるだれか、わたしが大事に思っているだれか、それだけで十分生きて行けた〉〈友情と感謝〉。

人がどれほど残酷になれるかを体験したエディにとって、殺害を止めるために何もしなか

った文明人たちに囲まれていることは、人生を「美しく」思う為には並大抵の努力ではなかったでしょう。彼はずっと〈しあわせではなかった〉のです。

その彼が、人生は「美しい」と思える幸せをよみがえらせた。〈癒されあふれんばかりの幸福感〉につつまれたのは、父親になってわが子を胸に抱いた時でした。

〈せかいいち幸福な男だと気づく〉のです。

それまで心に残っていた悲しみのしこりは、〈憎しみがどれほど危険か教える義務がある〉ことに形を変えました。そして、生かしてもらった自分の幸福を神に感謝し、神への恩返しとして〈苦しんでいる人を助けるのは幸運な人の勤めだ〉と言います。彼はヨーロッパを離れ、オーストラリアに住むことになりましたが、ユダヤ教徒として90歳になるまで世界に貢献できました。

〈経験しなければ、本当の意味で理解できない〉彼はそう言います。確かにそうですが、そのためには600万人の人生をひとつずつ歩まなければ、その意味が理解できないでしょう。しかし、それは無理なことです。だからこそ、彼のお母さんが〈私に代わって話しておくれ〉と彼に囁くのだと思います。

「毎日幸せでいてください。他の人も幸せにしてあげてください」彼はそう言って、幸福に make した自分の人生を見せてくれたのです。

『世界でいちばん幸せな男』を読んで

◆ 【 YA 】

12月の課題本は『世界でいちばんしあわせな男』だった。アウシュヴィッツ、他の収容所に送られて生還した男性の回顧録というものだった。彼は101歳で亡くなった。

以前アウシュヴィッツ、ビルケナウを訪れた時に見た、広大な土地に残された人間的悲慘、悪の限りを尽くした建物や施設、博物館に収められている遺品の数々が思い出された。中でも女性の髪の毛 2tには驚愕した。

収容所での壮絶な生死の境を生きた作者エディ・ジェイク。読んでいくうちに、彼の強靱な精神力と体力、身に付けていた高い技術、そして生きなければという強い希望が彼を生への具体的な行動につながったのだろうと思う。

『夜と霧』の作者 فرانクルの言葉。彼も収容所内でさえもモラルの大切さ、収容所内での助け合いを説いていた。「又、ある日私は一人の監視兵がそっとパンの小片をくれたことを思い出す。私は彼がそのパンを、彼の朝食の配給から節約してとっておいてくれた事を知っていた。そして私が涙が出るほど感動させたものは物質的なものとしてではなく、彼が私に与えた人間的なものであり、それに伴う人間的な言葉、人間的なまなざしであったと。」

そして希望と信仰は捨てなかった。どんな状況の中であっても、良心のある人たちは存在するのだ。エディ・ジェイクも、周りの人たちの助けであったり、家族の強い絆であったり、友人たちの支えがあったと述懐している。又、エディには強い運もあったかも知れぬ。

強制収容所内で行われていたものは人間的悲慘以外の何ものでもない。人間的尊厳も

何も無い狂気の世界で、ガス室、集団射殺、拷問、強制労役、実験台、ありとあらゆる方法で人々は殺されていった。

ナチスの思想はどうして生まれたものか理解できないが、ヒトラーの時代のように組織、集団、国等が一つの或る方向に突き進んだら、そこにはもう一個人の良識や良心は入り込むすきは無く、逆に非難され、またたく間に間違った道に陥る恐ろしさを知る。

日本も又同じような道を辿っているのではないかと。そういう不安は大きくなっている。今世界のあちこちで戦争が続いている。そして核の使用も懸念されている。いま世界で何が起きているか、それらの事実を知ることが大切になりたいと心底思う。

◆【 KT 】

アウシュヴィッツの本は今迄もありました。アウシュヴィッツに関して読むとつらくて読むのをやめようかと思うくらいです。今回もう解放されたところからとばして読もうかと思いましたが、ちょうど解放される場所だったので結局全部読めました。

それにしてもどうしてこんなことができるのかと思うばかりです。

自伝を書いた人は生きるために親から技術とか資格みたいなものを教育を勧められていたり、人に自己犠牲をしてまでも与えること、支えてあげること、分け合うことを教えられていました。

お金はなくても逆境にあっても収容所で知恵と愛を駆使して生き延びられたのでした。

聖書のなかに、祈りの模範の中に 今日必要なパンを与えてください。という言葉があります。そして与えることは幸福になります。と言う言葉もあります。

必要な食べ物で満足して明日のものは明日きつと与えられると考えて生き延びたのです。

そして感心したのは、ひどい扱いを受けているのに卑屈になったり媚びをうったりせずに堂々と反論したり、意見を言ったりしていることです。

そしてさらに、諦めずに希望を持っています。希望は忍耐のいかり(船の)と言われています。

つらいことの中に、ドイツだけでなく他の国も逃げているユダヤ人を酷く扱って同情もしていなかった。

まわりをあてにせずに強く生きなければならなかったのです。

ドイツは昔のことを反省して近年では難民受け入れを政策としてきたこともありました。

ドイツ国民はアウシュヴィッツのあとに復讐されて酷いことをされていたこともテレビで放送されていました。

反省と復讐するべきか。今、昔の出来事を詠んで調べて考えて意見を各自認識していくべきなのでしょう。

◆【 JM 】

まず、表紙の笑顔が素敵である。その笑顔を見ると、どんな幸せな人生を歩んでこられた

のだろうと思う。まさか彼がアウシュヴィッツを生き抜いた人とは思わないだろう。

この本を読んで、人間はここまで残酷になれるのかと暗澹たる気持ちになった。「ユダヤ人」というだけで迫害を受ける・・・なんと理不尽なことだろう。人間を紙切れのように、落ち葉のように軽く扱い、人間の所業とは思えない。アウシュヴィッツに送られた人の中にはユダヤ人だけでなく、障害者、同性愛者、ナチスに反抗した人々もいる。結局、自分たちにとって都合の悪い人、目障りな人たちを虐殺したのだ。

ちょうど 12 月 16 日に、NHK の番組「世紀の映像 バタフライエフェクト」で「ナチ親衛隊 狂気の実行者たち」が放送された。自分で立つこともできない骨と皮になった人々、丸裸にされて歩かされている女たち(おそらくガス室へ行かされているところだろう)、死体の山、その傍らにいる親衛隊員たち・・・胸に刺さる映像だった。

収容所の近くには親衛隊員の住居もあり、そこで働いていた人は「普通の人だった」と証言している。その「普通の人」が多くの人を殺しているのだ。まさに「狂気」だが、戦争だから仕方がなかったではすまされない。

一方、自分の命が危険にさらされるかもしれないのに手を差し伸べた人もいた。匿ってくれた人、食糧を与えてくれた人・・・自分はどのような選択をするのか考えさせられた。安全な場所にいて「人間的な選択をしよう」と言うのは誰でも言える。はたして、あのような状況で信念をもって行動できるか。

1945 年に解放されたエディさんがその体験を語り始め、ユダヤ人ホロコースト生存者オーストラリア協会を設立したのが 1972 年である。その間、どれだけの思いを抱えてこられたのだろう。思い出したくもないことだっただろう。

私は幸せなんだなあと思う。子どもたちは独立しそれぞれ家庭をもっているが、誰も親にお金を借りに来たことがないというのは私の小さな自慢である。しかし、幸せだなあと思う一方で、小さなことで幸せを感じるのは人間として小さくないか、自己満足ではないのか、不幸せな部分に目をつむっているだけではないのか、とも思う。

この本を読んで、自分の人生を美しくするのは自分自身、幸せだと思ったらその幸せ分周りの人たちに親切にしようと思った。「やさしく礼儀正しく愛情あふれた人になるのに遅すぎることはない」(p.198)

◆【 T 】

エピローグに書かれているが、エディが終戦直後、ベルギーに拘留されているナチスの一人に面会に行き、「なぜだ？なぜあんなことをしたんだ？」と問うたところ、彼は震えて泣き出したそうだ。悪人には見えず、その姿は哀れなものだったという。

過去の戦争について学習したり、今の戦争のニュースを見たり聞いたりしたとき、常に疑問がわきおこる。「どうしてそんなことをするのか？なぜあんなことができるのか？」「踏みとどまることはできなかったのか？」

穏やかだった人々、仲良く暮らしていた人々、思いやり深い人々を戦争は、無情な人々に、残忍な人々に、冷酷な隣人に変えてしまう。戦争がなかったら、このナチスの一人も良き

隣人だったかもしれない、人間性を変えてしまう戦争の残酷さにぞっとする。

私たちは現在 80 年近く戦争のない平和な民主主義の中に生きている。これは、とても幸せなことであり、これからの時代も平和であり続けるように考えていかないといけないと思う。

戦争という大きな流れの中でも、フランスの小さな村々で見知らぬ人々から受けた親切、こっそり食べ物を分けてくれた善良なドイツ人、父の知り合いから受けた小さな親切、終戦間近の列車移動中パンを投げ入れてくれた人々。これらは、打ちのめされた人々にどれほど大きな希望を与えてくれたことだろうか。

私たちは、加害者の立場にも被害者の立場にもなる可能性がある。しかし、心の奥底には人間らしい心を忘れたくはない。何かできることはないか？ 自分に出来ることは何か？ 常に考えていきたい。大きなことはできないかもしれないが、小さな親切をした彼らのように、何かできることはあるのではないだろうか？

エディが生き延びることができたのは、色々考えられるが、親友クルトの存在が大きいと思う。励まし合い、助け合い、何気ない会話、そして時にはクスッと笑い合える仲間がいたら頑張ろうと思える。人は一人では生きられない。わたしを大事に思ってくれている人がいるというのは大きな支えだと思う。

◆ 【 望月悦子 】

この課題本から[夜と霧]のヴィクトール・フランクル(1905,3,26～1997,9,29)が浮かんだ。強制収容所での過酷な生活内容は異なれど、残酷で非人間的扱いによる尊厳の無さなどの共通点を知ることができた。2人ともドイツで生まれ、ドイツを愛したユダヤ人。もう一人頭をよぎったのが、アルベルト・アインシュタイン(1879,3,14～1955,4,18)彼もふたりと同じようにドイツ生まれのユダヤ人。この3人は、アドルフ・ヒトラー(1889,4,20～1945,4,2)が1933年からのナチ党政権下の反ユダヤ主義が国是時代にドイツで生活している。

今回の課題本から、エディ・ジェイク(1920～2021)とアインシュタインの人生の違いと共通点を考えてみたいと思った。その理由は、ふたりの人生の核になったのは、父親の存在が大きいと思ったから。

エディ・ジェイクは、ナチスの政権下ユダヤ人の迫害が加速する中で、息子の行く末を案じた父親の計らいにより、彼は「ドイツ人孤児」として腕の良い機械技師になった。収容所ではユダヤ人への虐待が行われたが、ドイツに利益をなすとみなされた者は生かされた。「パイプに漏れがあれば絞首刑」(P96)「七回ミスをしたら絞首刑」(P129)等々首から札をぶら下げながらの生活でもあった。

メンタル面では、厳格なユダヤ教徒であった父からは「正義と道徳」を厳しくしつけられて育っている。「モラルを失えば、自分を失う(P103)」「心の弱い人はゆっくりとだが 確実にモラルをなくし、やがて人間性までなくした。自分に誠実でいよう、モラルを失わないようにしよう。しかし難しかった。飢えは体力を奪うのと同じ速度でモラルも奪っていく。わたしは、一度も文明人であるという意味を失ったことはない。罪人になってまで生き残ってどうする」という

価値観は父親の養育によるもので彼の人格を作り、それが惨い醜い環境の中でも生き延びていく原動力になっているように思える。

一方アインシュタインは、資料によるとユダヤ人ではあったものの、父親は敬虔なユダヤ教徒というわけではなかったため、彼は5歳から3年間、ミュンヘンにあるカトリック系公立学校へ通っている。1896年1月、父の許可のもと、ドイツ帝国の兵役義務から逃れるために彼はドイツ市民権を放棄した(その後スイス国籍を取得するまで無国籍となった)。

世界的に有名になった彼は世界各地講演旅行に出かけている。そんな中1932年、アメリカへ3度目の訪問をすべくドイツを発つ。しかし、翌年にはドイツでナチスが政権を獲得。以後ユダヤ人への迫害が日増しに激しくなっていったため、彼はドイツに戻ることはなかった。そのおかげで、彼は強制収容所の苦い体験はないけれど、1933年、ベルギー王妃の厚意により、ベルギーの港町に一時身を置く。しかしこの町はドイツとの国境に近かったため、ドイツの手が及ぶのを恐れた彼はイギリス、スイスへの旅行の後、再度イギリスへと渡る。その後アメリカへと渡り、プリンストン高等学術研究所の教授に就任。また、プロイセン科学アカデミーを辞任。なお、この年にはアインシュタインの別荘をドイツ警察が強制的に家宅捜索するなどという出来事もあった。その後ドイツはアインシュタインを国家反逆者とした。などの迫害を受けている。

エディもアインシュタインも父親の計らいや寛大さによって、敬愛しているドイツからではなくヒトラーから離れている。しかし、その後の人生はドイツに止まるか離れるかによって決まってしまった。

子を思う親の深い愛情の下で育ったふたりの共通点は、それぞれの価値観のもとで最後まで人間らしさを失わず生き抜いていることにあると思う。

エディの言葉の中で心に残った箇所は、「私が今まで学んだなかで最も重要なことは『人の営みの中でもっとも素晴らしいのは、愛されることだ』友情が無ければ、人間は壊れてしまう。友人とは、生きていて実感させてくれる(P92)」愛されて育った彼は愛着関係の素晴らしさが構築されているからこそ、お互いが愛し合える仲間を見つけ出している。それが力となり生きる希望へと繋がれているのだと思う。さらに父親の教訓のひとつに、「技術は身を助けると断言し、仕事の重要性をいつも強調していた。人は仕事で社会に貢献する。社会が正しく機能するためには、各自がそれぞれの役割を果たすことが重要(P96)」など厳格なユダヤ教徒である父親から教育されたからこそ「私には信念がある。モラルを失わず、希望にしがみついているれば、体は奇跡を起こせる。明日は必ずくる。死はいずれおとずれるが、命あるところに希望はある。それなら希望にかけてみよう。(P138)」「人間の体は最高の機械だが、精神的な活力が無ければ動かない。食料が無くても、水が無くても数日は生きられるが、希望が無ければ周りの人々への信頼が無ければ、おそらく体は故障して壊れてしまう。友情や助け合いがあり希望があったから生き延びてきた。」と強靱な信念の下生き延びることができたのだと思える。

一方、アメリカに移住してからのアインシュタインは、1935年永住権を申請し取得している。1940年アメリカ国籍を取得。1945年広島市への原子爆弾投下報道に衝撃を受ける。9月2日第二次世界大戦終結。連合国の一員であるアメリカは戦勝国となったが、アインシュタインは「我々は戦いには勝利したが、平和まで勝ち取ったわけではない」と演説している。

1948年、イスラエル建国。1952年、イスラエル初代大統領が死去したため、イスラエル政府はアインシュタインに第2代大統領への就任を要請したが、彼はこれを辞退した。しかし、自分がユダヤ人であることを決して忘れてはおらず、著作権をヘブライ大学に贈っている。

アインシュタインは多くの言葉を残しているがその中で心に留まったのは「人間の知識と技術だけでは、暮らしを幸福で尊厳のあるものには出来ない。人類は、客観的眞実を見出すことに、高い道徳基準と価値を置くものだから。」「平和は強制できるものではない。それを理解することでしか到達できない。」

ふたりの体験は、「強制収容所」の「中」と「外」の違いはあるけれど、人間としての誇りを失わず信念を全うしている点では共通していることが理解できた。

◆【 MM 】

今月の課題本の裏表紙に書かれている英文「Life can be beautiful if you make it beautiful. It is up to you.」について考えてみる。私が課題本の内容に沿って英文を訳せば「素晴らしい人生にすることはできる。自分次第で」とするだろう。エディの人生については読むのも辛い描写が多くあったが、現実起こったことだ。いつも希望をもつことは難しいが、生きることを諦めずにいることが大事なのだ。

ユダヤ人というだけで学校を退学になり家も追われる。そんな中エディの父は出生を偽ってまで学ぶ機会を与えてくれた。学が自分を助けると言い残して。完全に安全な状況に置かれるまで命の危機は何度もあった。その度にエディは考え選択し懸命に生きた。運だけではない。努力、機転、人間関係、さまざまなことが彼を生かした。よく生きてくれた、生きることがつらい時もあっただろうに。

エディは家庭を築いてからも自分の身にあったことを子供には詳しく伝えたことはなかった、重荷を背負わせてはいけないと思ったからだ、というところで泣いた。私の祖母もこちらが聞くまでは戦争について語ることはなかった。自分からは話さなかったけれど尋ねるといろいろ教えてくれた。学生でも工場に行かなければいけなかった。今の生活からは考えられないような環境を生き抜いた人の話を聞くことは大事だ。語れる人も少なくなってくる。これから私にできることはなんだろう。体験した人の話を聞くことが難しければその記録を読んだり見たりすることではないか。戦争を知り、そしてその惨劇が繰り返されることがないように選択していきたい。